家庭科教育における生活文化に根差した地域の伝統産業としての「ものづくり」教材の検討

渡瀬　典子*，八重樫　英広**，馬内　幸恵***，長澤　由喜子*
*岩手大学教育学部，**岩手大学教育学部附属小学校，***岩手大学教育学部附属中学校

（平成２８年３月２日受理）

１．はじめに

家庭科教育における「ものづくり」教材は，児童・生徒の日常生活に基づく作品製作はもちろんのこと，地域の生活文化・産業に構想を得た「ものづくり」教材開発(例：刺し子)が各地で試みられている。人々のライフスタイルや生活要求が変化する中，近代から続く産業への理解とともに，現代の生活につながる教材開発は多くの学校現場で求められているといえよう。

地域の生活文化に根差した伝統産業の振興は「地域主義」を持ち出すまでもなく，様々な自治体で取り組まれている。京都市では平成13年度から春分の日を「伝統産業の日」と定めて，市民の着物の着装や染織産業への理解を促す啓発活動を実施している。国レベルでは，経済産業省「伝統的工芸品産業の振興に関する法律(伝産法)」の第１条で「一定の地域で主として伝統的な技術又は技法等を用いて製造される伝統的工芸品」の「産業の振興を図り，国民の生活に豊かさと潤いを与えるとともに地域経済の発展に寄与し，国民経済の健全な発展に資すること」を伝統産業振興の目的として，補助金の支給を含む支援が措置されている。

また，民間や地方自治体レベルでも各地域での特産品ブランドの認証事業があり，盛岡市では「安心・安全なメイドイン盛岡」の地場産品を「盛岡特産品ブランド認証商品」として認証し，盛岡市のブランドイメージを高めるための戦略として取り組まれている。本報告では，この中の「ホームスパン(home spun)」に焦点を当て，総合的な視点から地域の伝統産業としての「ものづくり」教材について検討する。

「ホームスパン」とは「羊毛を染色して，手で紡いで手織りしたもの」のことを指す。明治期に欧米から導入されたホームスパン産業は戦後，全国的に廃れていく中で，現在も岩手県央地域周辺を中心に県内数か所に工房が残存し，その生産量は全国の８割以上を占める[1)]。

そこで，本プロジェクトは「羊(毛)」や「ホームスパン」を教材開発の対象とした。「羊(毛)」を対象としたのは先述の社会的背景以外に「技術・家庭科(技術分野)」で「生物育成」が必修になったこと，めん羊を軸にした復興プロジェクト（大船渡市・越喜来）等，家庭科を超えて，社会科，総合的な学習の時間，特別活動，さらには特別支援学校で行われている作業学習とリンクして展開可能だと考えたからである(図1)。

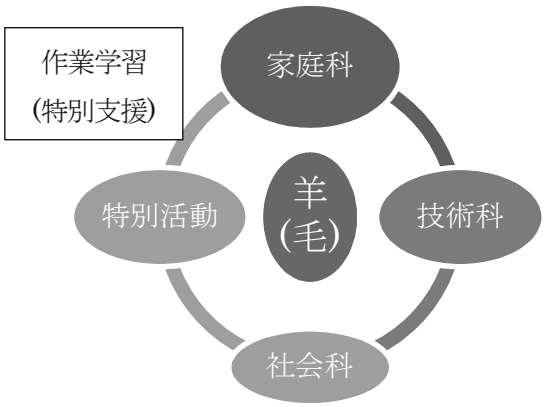

図１　プロジェクトテーマと学校教育活動との関連

２．研究計画と方法

プロジェクト研究を進めるにあたり，以下の研究計画及び方法から対象にアプローチすることにした。本年度は研究着手初年度のため，課題把握と教材研究を中心に展開する。

1. 地域の生活文化・産業にリンクした「ものづくり」教材の指導計画における課題把握
2.教材･授業実践の収集と岩手県内のめん羊飼育・産業の現状把握：「日本ホームスパン」等

3.家庭科教員対象の講習会（講師・植田紀子氏）
4. 研究発表（日本家庭科教育学会地区会）
5. 大学の小学校科目「小学校家庭科」にて教材研究授業（フェルト製作）
6. 附属中学校で生徒の実態調査
7. 学部プロジェクト中間報告会発表
8. 研究まとめ，研究報告の作成

このうち，本報告は主に研究計画 1，3，6 の取り組みから明らかになった課題を中心に報告する。

3．結　果

(1) 家庭科教育おける（羊）毛を用いたものづくり教材の扱い

現行の学習指導要領の記載に基づき，各学校段階における学習内容（ミニマムエッセンシャルズ）について最初に整理をしておく。

小学校の家庭科では，羊毛に関連する内容は「快適な着方」，すなわち「冬を温かく過ごすための着方」の中に登場する。そのほか，被服材料の構成として，織物，編み物等の布の特徴がふれられている。授業事例として，簡易織物づくりから布の特性をつかむ実践はこれまで多く報告されているが，方法は様々である[2)]。

中学校の技術・家庭科（家庭分野）では，被服管理の学習内容の中で取り上げられ，例えば毛製品の「洗濯による収縮性」が学習内容に位置づけられている。毛製品の洗濯に関する教材について，岩手県中学校技術・家庭科教育研究会の実践報告集を見ると，「寒冷地である本県の特質から毛製品の着装は重要な学習事項」だと言及されている[3)]。また，同報告集に記録された実践報告を見ると，「毛製品の手入れ（洗濯）を失敗しないこと」を学習目標とする授業が 1970 年～80 年代頃に多く報告されている。この時代は，被服製作において「編み物」が教材に挙げられていたことから（図 2），（羊）毛の材料特性，製作，手入れについて取り組みやすかったといえる。

図 2　技術・家庭科の教科書から（1970 年代）

しかし，現在の中学校学習指導要領では，（羊）毛を用いた織物・編物製作実習の記述がなくなったこと，授業時数が減り，製作の時間が確保しにくくなったことから，中学校の家庭科の授業では毛糸を用いた製作はあまり行われていない。以前の中学校技術・家庭科で学習されていた内容は，高等学校家庭科の選択科目「服飾デザイン」に移行し「刺しゅう，編物，染色，織物，その他の手芸など」について「地域の伝統文化なども関連付けて」扱うこととされている。

被服製作は製作技術の習得のためだけではなく，被服製品の着装・管理を児童・生徒が考えるための手立てでもある[4)]。織物や羊毛を用いた製作は衣生活に関する総合的なアプローチの一つといえるが，男女必修後に実践が減っているのは，学習指導要領におけ学習内容の扱いの変化とともに，教員にとって多人数の一斉授業に向かない教材だと捉えられやすいことも一因といえる。具体的には，①織機等の用具・材料の準備，②児童・生徒への指導の不安，が挙げられる。そこで，この①と②の不安を解消するための教材開発を検討することにした。

(2) 家庭科教員対象の講習会（教材研究）

この講習会は，家庭科教育で展開可能な教材の検討をするため，本県の産業の一つでもある「ホームスパン」について理解を深めることを目的とした。講師として，ホームスパン作家である

植田紀子氏をお迎えし，簡易的に織物を学ぶことができる教材「Weaving on sticks（編み棒を使用した織物）」の検討と製作をした。参加者はプロジェクトメンバーを含む８名である。

作品製作は２点，人形とブレスレットである。前項で言及した課題への対応として，これらの教材が優れた点は，①児童・生徒が一斉に作品に取り組むことができる，②技法が基本的にはシンプルである，③配色や大きさを好みに応じてある程度選ぶことできる，等が挙げられる。

図３　作品製作の過程(人形)

図４ ストローを用いた教材提案
（植田紀子氏による）

用具の簡便化の工夫として，織り機に縦糸を張るかわりに「さいばし」や（図３），「ストロー」（図４）を用いることが植田氏から提案された。講習で使用されたテキストでは編み棒が用いられていたが，市販の編み棒を学習する児童・生徒分揃えるには金銭的負担が大きい。その点，さいばし，ストローは編み棒に比べて廉価にどこででも購入できるメリットがある。課題としては，糸の始末をしなくてはならないところが複数箇所あるため，その際に，教員の支援が必要になる点である。例えば，図３に示した人形は，手・足・顔に分ける箇所，手の先，つま先の表現・処理，図５のブレスレットでは，ボタンやトグルをかけるためのループや端の始末が支援の対象になると考えられる。作品の作りやすさでは，ブレスレットのほうが取り組みやすく，織りの作業は横糸を縦糸に見立てたストローに交差させるだけである。しかし，中学生が授業時間内に作品を完成させるには２～３時間程度は必要と思われる。

図５　参加者の作品(ブレスレット)

(3)中学生と「ホームスパン」 −質問紙調査−

毛製品の手入れは，中学校の技術・家庭科（家庭分野）における主要な学習内容として位置づけられてきた。そこで，毛製品を含む「洗濯」に関する学習を終えた附属中学校１年生 151 名を対象に質問紙調査を実施した。調査時期は 2016 年 2 月，調査方法は集団自記式による。

本報告では，調査項目のうち，プロジェクトのテーマ「地域の伝統産業」のひとつとして注目した「ホームスパン」に関する設問の中学生の回答

結果を述べる。「ホームスパン」製品は，盛岡市内のデパート，小売店，観光地（小岩井農場まきば園，盛岡手作り村など）で販売されている。また，先述の観光地では織り機を使ったホームスパン体験ができるところもある。そこで，調査対象の中学生にとって，これまでの生活体験のうえで「ホームスパン」という言葉がどのように認知されている／認知されていないかを見るために質問項目を設定した。

ここで取り上げる設問は「ホームスパンという言葉を聞いたことがありますか」と「ホームスパンという言葉から連想する事柄を書いてください」の２問であり，全員に回答を求めた。

表１を見ると，「ホームスパン」という言葉を「聞いたことがある」と回答した生徒は「聞いたことがない」生徒とほぼ同数だったが，全体の半数には満たない状況だった。回答者の性別で見ると，女子生徒の方が「聞いたことがある」という回答が多い傾向にある。

表１

「ホームスパン」という言葉を聞いたことがあるか

	ある	ない	計
男　子	29	42	71
女　子	42	36	78
計	**71**	**78**	**149**

$\rho < 0.1$

注）「無回答」の回答数は表から外した

次に，ホームスパンという言葉から連想することを自由回答形式で質問した。分析にあたり，自由回答記述の内容をアフターコーディングし，記述内容が本来の意味・キーワードに「よくあっている」「まぁあっている」「何とも言えない」「やや違う」「全く違う」「わからない・知らない」「無回答（空欄）」の７種類に分類した。

表２は，「ホームスパンという言葉を聞いたことがあるか」という設問の回答結果と，この分類をもとにした自由回答記述との関連を見たものである。

表２

「ホームスパン」という言葉を聞いたことがある　×

この語から連想する語彙との適合度

	ある	ない	総計
よくあっている	17	0	17
まぁあっている	25	0	25
何とも言えない	1	0	1
やや違う	1	1	2
全く違う	16	48	64
わからない・知らない	6	7	13
記入なし（空欄）	5	23	28
総計	**71**	**79**	**150**

「よくあっている」の回答例は「毛糸，みちのくあかね会」など，具体的なキーワードが挙げられているものを選定した。「まぁあっている」に分類したのは，「盛岡ブランド」など，社会科や総合的な学習の時間で学習したと思われる語や「布」「手作りのもの」など間接的に関連する語を１つだけ挙げている場合が該当する。

中学生が最も多く回答したのは，言葉の響きが影響したのか，「家でパンを作る」だった。この回答は「全く違う」に該当する。はっきりと「わからない・知らない」と記入された回答と無回答（空欄）は分けて表２に記載した。表２から，「聞いたことがある」という回答のうち，約４割は「言葉として聞いたことはあるけれど意味をよくつかんでいない」状況であり（表中の下線をつけた群），35.2%は「漠然とイメージしている」，そして，ある程度のイメージを持ってホームスパンを捉えていたのは調査対象者全体の 11.3%という結果だった。

４．まとめ

本プロジェクトは，家庭科教育における学習教材を他教科や特別活動，総合的な学習の時間とつなげて展開することを探る試みの端緒である。学

習活動をダイナミックに構成するために地域社会の伝統産業，ものづくりを題材に置いた。また，家庭科の学習教材として馴染みやすい被服製品，とくに，岩手県の産業である「ホームスパン」を教材研究の対象とした。

「ホームスパン」は本来，大量生産ではなく，小規模の生産者が羊毛を「染める・つむぐ・織る」一連の作業をすることを指す。毛製品の管理に関する学習は被服材料，洗剤の性能改善に伴い，日々更新する内容を含む。木村は毛製品の手入れに関する学習は実習・実験が必要であり，「根拠をもった」学びが必要だという[5)]。その点で，ホームスパンの技法を効果的に取り入れて授業の中で展開することで，学習が深まると推察される。なお，この点については，今後実践を含めた検証が必要である。実践化に際し，ホームスパンの特性，羊毛製品の材料特性を加味した教材提案と子どもの発達段階に応じた製作場面における指導・支援について改めて検討したい。

＜引用・参考文献＞

1）LLPまちの編集室編(2015).岩手のホームスパン，101
2）町田万里子(2001).ともに作る家庭科授業－自分が変わる・まわりも変わる－.不昧堂書店,51
3）岩手県技術・家庭科教育研究会(2000).技術・家庭科ってなに？　～教科の本質を追い求め続けた研究実践の軌跡～,111
4）渡瀬典子(2013).家庭科教育における「被服製作」はどのように扱われてきたのか.年報・家庭科教育研究34,1-12
5）木村美智子(2016).被服整理学の研究成果と家庭科教育.日本家政学会誌67(2),124-125